

未来に文化をつなぐための協働：ブータンの遊び 歌ツァンモ研究の展開

著者	加藤 富美子, 伊野 義博, 黒田 清子, 権藤 敦子
雑誌名	伝統と創造：東京音楽大学民族音楽研究所研究紀要
巻	6
ページ	29-42
発行年	2017-03-25
出版者	東京音楽大学民族音楽研究所
ISSN	2189-2350
著者版フラグ	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001164/

未来に文化をつなぐための協働 —ブータンの遊び歌ツァンモ研究の展開—

Cultural Collaboration for the Future :
Unfolding the Research on *Tsangmo*, the Bhutanese Playful Singing

加藤富美子 KATO Tomiko 伊野義博 INO Yoshihiro
黒田清子 KURODA Kiyoko 権藤敦子 GONDO Atsuko

2016年9月24日～25日にブータンの首都ティンプーにて日本・ブータン民俗音楽研究会主催「ブータンの宝石ツァンモ — 未来に文化をつなぐ —」を開催した。二つの中等教育学校の対決によるツァンモ大会、ならびにツァンモ研究をめぐるシンポジウムを主たる内容とするものである。ツァンモ大会では、日本側からの働きかけにより学校側の伝統文化についての意識が変わり、シンポジウムでは、日本側からの調査報告、ブータン側からの大学教育での実践、放送文化における新たな展開等を広く交流し合う機会をつくったことで、存続が危ぶまれている民俗音楽の継承発展に新たな光が投げかけられた。

本稿では、開催に至るまでの7年間にわたる日本側の調査研究、研究公開等における協働の様相を辿りながら、ツァンモ研究の展開における協働の意義を「共同研究」、「相互啓発」、「開発研究」としてまとめた。

キーワード：ツァンモ *tsangmo*、ブータン Bhutan、
協働 collaboration、相互啓発 mutual enlightenment

1 はじめに

本稿では、ブータンの伝統的な遊び歌ツァンモ *tsangmo* の調査を通して、日本とブータンとの間に生まれた多方面の人々や関係機関との結びつきが、文化の継承や音楽教育の取り組みに発展していった様相を描くことにより、日本とブータンにおける教育や文化に携わる多方面の人々の協働がどのように形成されてきたかについて明らかにする。同時に未来に文化をつなぐ協働のあり方について一考するものである。

2016年9月24日(土)、25日(日)、本稿執筆者が構成メンバーとなっている日本・ブータン民俗音楽研究会は、ブータンの首都ティンプーにおいて、「ブータンの宝石ツァンモ — 未来に文化をつなぐ —」と題して、ブータンの伝統的な遊び歌であるツァンモの大会及びシンポジウムを開催した。この催しは、一般社団法人東洋音楽学会、日本民俗音楽学会、日本音楽教育学会の後援のもとに行われるとともに、日本・ブータン外交関係樹立30周年事業の一環でもあった。ツァンモ大会は、ブータンの伝統的な市立校であるケルキ高等学校 Kelki Higher Secondary School にティンレガン・中央学校 Thinleygang

(Dechentsemo) Central School の生徒を招いて行われた両校による歌の掛け合いの対抗戦である。大会は、ブータンの教育大臣参観のもと、チェアマンとして、王立舞踊団主任研究員がかかわるなど、日本・ブータン双方の関係者の協力のもとに行われている。続くシンポジウムでは、ブータン側からはブータンの国語であるゾンカの開発委員会、教員養成、教育関係者、教育者、日本側からは、民俗音楽研究、音楽教育、文化人類学等の専門家が一同に会して、ツァンモを通じた文化継承についての議論がなされている。

ツァンモの調査は、日本の音楽教育研究を刺激し、学校教育現場の教師との協働研究による授業開発にも結びついてきた。ここでは、ツァンモの掛け合いによる双方向性を視点に新たな音楽授業が模索されるとともに、例えば「掛け合い歌の教育学」と題した日本音楽教育学会での一連の研究発表などへと発展してきた。ここでは、既成の楽曲の表現や鑑賞が中心となっている音楽教育に対して、自身の言葉を旋律に乗せて、即興も交えて歌でコミュニケーションしていく新たな音楽教育の方向性を提案している。

当初小さな動きであったツァンモの調査は、その活動を通して次第に人とのつながりを生み出し、文化の継承や教育に携わる人々の具体的な行動へと結びつき、様々な協働の形となってきた。

本稿では、まず、これらの協働の姿を共同研究、相互啓発、開発研究といった枠組みから捉える。次いで活動の実際について「ツァンモの調査研究の経緯と人々とのつながり」としてその全体像を示し、「ツァンモ大会にかかわる共同研究、相互啓発」、「シンポジウムにかかわる共同研究、相互啓発」について記述する。最後に、これらを踏まえ文化継承にかかわる協働のあり方について考察したい。なお、ツァンモの実際及び研究成果については、文末文献一覧を参照されたい。

2 協働の形成・成果と共同研究・相互啓発・開発研究

日本・ブータン民俗音楽研究会によるツァンモ研究において、日本とブータンの教育や文化に携わる多方面の人々の協働がどのように形成されてきたか、また未来に文化をつなぐためにはどのような協働が必要とされるか。これをとらえるために、協働の形成と協働による成果を、「共同研究」「相互啓発」「開発研究」の枠組みを設けて分析していく。

「共同研究」というまでもなく研究における協働のもっとも一般的な形態である。二国間での音楽研究にあっては、文化全般の深い理解にもとづく音楽文化研究を行うために、研究対象とする音楽の国・地域の専門家との共同研究は不可欠である。本研究にあっては、「共同研究」の中心としてブータン各地でのツァンモ調査があげられる。ツァンモ調査は日本側の民俗音楽研究、音楽教育研究、文化人類学を専門とする研究者とブータン側の歌謡の翻訳者、音楽研究、文化研究を専門とする研究者との共同研究が必然であった。また、学校教育におけるツァンモの実践や放送を通じたツァンモの遊び方など、現代社会におけるツァンモの新しい生き方をとらえるにあたっては、通訳はもとよりブータンの研究者との共同研究が欠かせなかった。

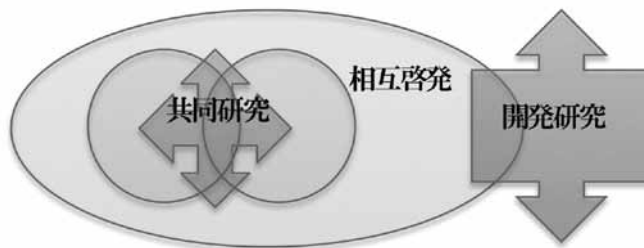
「相互啓発」は、共同研究として協働するなかで形成され、かつ協働による成果として大きな意義をもつ。共同研究にあつて相互啓発をもたらさないような研究は、相互に研究協力者としての関係で終わってしまう。本研究にあつては、大きくとらえると、日本側によるツァンモ

への深い関心とその関心に基づくツァンモ研究が、ブータンの人々にツァンモの文化的な重要性への気づきをもたらしたこと、ブータンが有しているツァンモ文化の全体が日本側に掛け合い歌の文化の重要性への気づきをもたらしたことが相互啓発の重要な一例といえる。

「開発研究」は、共同研究によりもたらされた相互啓発をふまえて、それぞれが自国の音楽文化や音楽教育の発展に向けて新たな開発を行っていく研究をさしている。本研究においては、ツァンモにみられる掛け合い歌としての教育的意義に啓発を受けた伊野、権藤らが、新潟や奈良の小中学校の教諭と協働しながら、掛け合い歌をいかした音楽授業を開発した例をあげることができる(伊野他 2014c, 伊野他 2015d, 伊野他 2016b)。また、掛け合い歌を生かした歌唱の学習過程の再考も研究が進められている(権藤他 2015、2016)。

一方、ブータン側の開発研究の例としては、当初から共同研究者としてツァンモの調査研究で協働してきた教員養成大学の講師が、日本側の研究に刺激を受けて、大学の授業に品物を媒介とした占いのツァンモを再現する授業を構想し実施した例などをあげることができる。また、学校のツァンモ大会への日本側の関心の高さに刺激を受け、校長先生が新しく赴任した学校にツァンモ大会を導入したという例も広い意味での開発研究ととらえることができるだろう。

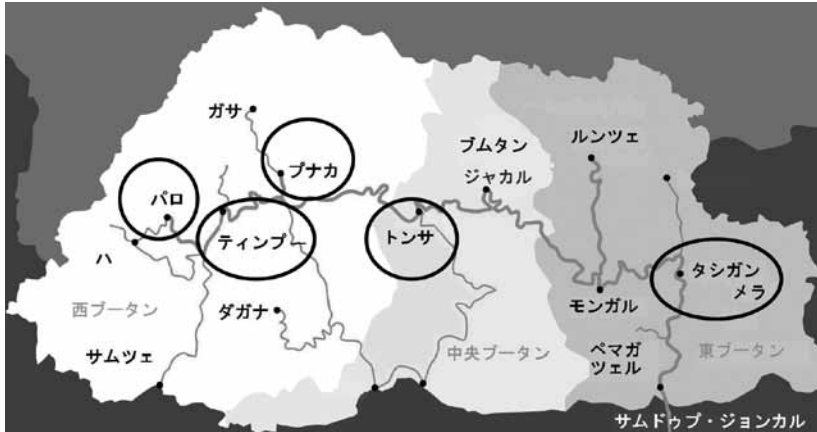
ここでは協働の形成・成果にみる「共同研究」「相互啓発」「開発研究」の枠組みとその一例について示した。具体について次項以降で詳しくみていくことにする。



3 ツァンモの調査研究の経緯と人々とのつながり

ツァンモは、ブータン各地に見られる伝統的な遊び歌である。1行6音節4行、計24音節を基本とした詩を一定の旋律にのせて歌い合う。遊びの内容は、二人または二組に分かれた掛け合いであったり、歌われた歌詞による占いであったりする。遊びのやり方には、様々な方法が見られる。

執筆者の一人伊野がブータンのツァンモという遊び歌に実際に出会ったのは2004年のことである。「ブータンには、自分の思いを歌で自由に言い合う素晴らしい文化がある」ことを実感し、ツァンモについて詳しく調査したいと思った。(中尾佐助 1959)、(糸永正之 1986)、(藤井知昭 1988)といった先行の調査報告に学び、本格調査に入ったのは2010年パロ Paro においてである。調査は、基本的にツァンモの遊びを知る人に集まってもらい、遊びを再現する方法を採った。その後、プナカ Punakha、トンサ Trongsa、タシガン(メラ) Trashigang(Merak)へと主要国道沿いに東へと調査を進めた。またその過程で学校教育の実践現場との交流も行った。以下ツァンモの研究と交流の概要を時系列で報告するとともに、調査を通して出会った人々や関係機関を紹介し、活動の広まりについて概観する。



【図1 調査地と交流の広がり】

3.1 ブータンでの調査研究と交流の広がり

1) 2010年10月パロ

ここではじめてツァンモの実際を知った。ツァンモの遊び方は、2種類あった。一つは、掛け合いの形式を持つもの、もう一つは、品物を媒介とした予言、占いをするものであった。前者はさらに二人による掛け合い、グループによる掛け合いがあった。また、後者には、個々の人の品物を歌いながら木の枝で順に指し、歌われた歌詞の内容によりその人の人生を占うものと、歌によりペアを決定し、二人の相性を占うものとに分けられた。調査結果は、伊野(2012)にまとめられている。

調査の参加者は、伊野、ツェワン・タシ Tshewang Tashi、ペマ・ウォンチュク Pema Wangchuk である。ツェワンは、パロ教育大学の講師でブータンの伝統音楽家でもある。大学では、伝統音楽やディグラム・ナムジャ Driglam Namzhag というブータンの儀礼作法を担当している。教員養成、伝統音楽、伝統文化に造詣が深い。ペマは、フリーランスのベテランガイドであり、ブータンの国語ゾンカ、英語、日本語を話し、その他ブータン各地の多様な言語の理解が深い。この二人の存在が、それからのツァンモの調査研究の推進力となる。なお、調査にあたっては、音楽学者でありブータン音楽の演奏家として知られているジグミ・ドゥッパ Jigme Drukpa に基本的なレクチャーを受けている。

2) 2011年8月～9月パロ、ティンプー Thimphu

上記メンバーに加え、日本側から民族音楽、音楽教育、文化人類学等を専門とする加藤富美子(現、東京音楽大学)、黒田清子(現、東京福祉大学)、権藤敦子(広島大学)、山本幸正(国立音楽大学)といったメンバーが参加した。この年は、ジグミ・ドゥッパの他、ブータンの伝統舞踊・音楽の専門家であるソナム・デンゴ Sonam Deng、ブータンの民族文化の調査、記録、保存活動を行うケン・ソナム・ドルジ Kheng Sonam Dorji へのインタビューを行っている。

3) 2012年9月プナカ(チャン・イイ Chang yee)

ツァンモの遊び方は、パロの調査と共通していた。法要や正月など人が集まったときにツァンモをしたという。現在ツァンモはほとんど歌われていないため、ツァンモをして遊ぶのは30～40年ぶりだという人もいた。3種の旋律が確認された。調査結果は、(伊野、

黒田 2014a)にまとめられている。

この調査は、伊野、黒田、ツェワン・タシ、ペマ・ウォンチュクによって行われた。

4) 2013年12月トンサ(ツァンカ Tshangka、タンシジ Tangsibji)

ツァンモの形式としては、対抗合戦の形式の他に、レトロ・ドムニ Lathoro Domni や「まわりうた」の形があった。レトロ・ドムニは、中心となる一人の歌い手が参加者に歌を歌いかけ、その詩の内容から予言や占いをしていくものである。また、「まわりうた」では、参加者一人一人が歌を歌いまわすもので、自分の気持ちや人生について歌で語りかけていく。ツァンモの遊びの多様性がうかがえた。

しかしここ 20、30 年で生活形態が変化した。子どもは学校へ通うようになり、ツァンモも歌われなくなっていった。目の前で消えつつあるツァンモをどうすべきなのか、考えさせられた。調査結果は、(伊野他 2014b)、(黒田 2014)にまとめられている。

この調査は、伊野、黒田、権藤、山本、ツェワン・タシ、ペマ・ウォンチュクそれに音楽教育を専門とする尾見敦子(川村学園女子大学)によって行われた。

この年、これまでの調査と人的つながりを活用し、「掛け合い歌のメカニズムを応用した音楽学習過程の研究-アジアの民俗音楽調査をもとに」をテーマに科研費に応募している。

5) 2014年9月タシガン(メラ)

科学研究費を得た我々は、ブータン最東部タシガン サクテン郡 Sakteng メラ村に調査の足を伸ばした。メラではツァンモではなくカプシュー Khapsho という類似した遊び歌がみられた。カプシューは、メラの言語ブロッパケ Brokpake で行われ、旋律がなく朗唱されるもの、旋律を伴って歌われるものに大別された。ツァンモとカプシューには、遊び方、旋律、歌詞に共通性がみられ、明らかに影響関係がある。

また、この年は、ルンツェ Lhuentse 県、ブドウル Buudur 村、ブムタン Bumuthang、タシガン県ラトン Rongthung 村出身者へのツァンモ経験についてのインタビューやラジオ放送の調査も行い、ツァンモが地方言語でも歌われていること、ゾンカ語学習と関連して学校で学ばれていること、ラジオ放送により全国的に楽しまれていることが明らかにされた。調査結果は、(伊野他 2015a, b)、(権藤他 2015)にまとめられている。

この調査は、伊野、黒田、権藤、ペマ・ウォンチュクによって行われた。

6) 2015年9月ティンブー、サムテガン Samtengang

学校教育におけるツァンモの伝承の取り組みとして、ワンデュポダン県 Wangdue Phodrang サムテガン・セントラル・スクール Samtengang Central School のツァンモ大会を調査し、報告した(伊野他 2016a)。この学校では、年に一度4月にツァンモ大会が行われ、チームで競い合うことでツァンモの遊び歌としての側面が伝承されていた。

この調査でキンレイ・ヤングゾム Kinley Yangzom 校長、ゾンカ語教師で文化教育担当のタシThashiとつながる。二人は、後のティンブーでのツァンモ大会で協力願うことになる。

学校での伝承について、もう一つ我々が直接取材したのは、ケルキ高等学校のガワン・ナムゲル Ngawang Namgyel の取り組みである。そこでは、生徒が、自分の出身地のツァンモを直接取材し、それをもとに、学校で大規模なツァンモ大会を開催している。

また、パロ教育大学ゾンカ語の授業でもツァンモの学習が行われており、それを参観することができた。ここでは、ツェワン・タシの協力を得ている。

ツァンモの継承については、テレビやラジオなどのメディアによる伝統文化関係の放送

の役割も重要な役割を担っている。例えば、クズ Kuzoo FM 放送局による「ツァンモの時間」やブータン国営放送 BBS による「ツァンモ・テンミ Tsangmo Thenmie」などである。これらを担当しているクズ FM 放送のツェリン・デマ Thering Dema、BBS のダワ Dawa に取材した。また、再びジグミ・ドゥッパに面会し、ツァンモの歴史やブータン文化について、情報を得ている。この調査は、伊野、加藤、黒田、権藤、山本、ツェワン・タシ、ペマ・ウォンチュクによって行われた。

こうした経緯を経て、ツァンモを中心としたブータンの民俗音楽継承の活動の意義や継承の重要性が鮮明になってきた。そこで、これまでの研究調査活動の中核メンバーを日本・ブータン民俗音楽研究会 Japan Society for Bhutanese Music Studies として再編した。そして学校対抗のツァンモ大会及び未来の文化継承に向けたシンポジウムをティンプーにて計画、「ブータンの宝石ツァンモ－未来につなぐ」と題して実行することとした。会のメンバーは、日本側からは伊野、黒田、加藤、権藤、山本、ブータン側からは、ジグミ・ドゥッパ、ツェワン・タシ、ペマ・ウォンチュクである。

7) 2016 年 7 月、9 月ティンプー

7 月には、伊野、黒田がティンプーを訪問、現地でのコーディネートを務めるシデ・ブータン Zhidey Bhutan とともに打ち合わせを行った。ツァンモ大会は、先のサムテガン・セントラル・スクールの校長であったキンレイ・ヤングゾムが、ティンレガン中央学校に赴任したため、この学校とブータンの伝統的な私立校であるケルキ高等学校との対抗戦とすることになった。両校を訪問するとともに、大会及びシンポジウムに必要な人員として、ブータン王立舞踊団 Royal Academy of Performing Arts 主任研究員のクンザン・ドルジ Kunzang Dorji、ゾンカ開発委員会 Dzongkha Development Commission 主任研究員のペマ・ウォンディ Pema Wangdi に面会した。クンザン・ドルジは、ブータンの舞踊をはじめ伝統文化の専門家で、ツァンモ大会のチェアマン及びシンポジストを、ペマ・ウォンディには、ゾンカ語をはじめブータンの言語文化の専門家としてシンポジストを依頼した。このような準備を経て、9 月の当日を迎えている。ツァンモ大会及びシンポジウムの詳細は、4、5 で述べる。これらに平行し、秋田県横手市の掛唄についての調査及び科学研究費研究協力者として娜布其による内モンゴル及びチベット族の掛け合いの研究も進められ、日本、アジアにおける広範囲な掛け合い歌の状況が明らかになってきた。これらは、(伊野義博研究室 2015, 2016, 2017)、(娜布其 2014, 2015, 2017)、(伊野他 2017) にまとめている。

3.2 日本における音楽教育研究活動の拡がり

ツァンモの調査は、掛け合い歌における即興や掛け合いのメカニズムを解明、援用し、日本の音楽教育において「歌う」ことを再考し、新たな活動として提案する研究へと結びついた。具体的には、小中学校教育現場の教諭明道春奈(奈良県大淀町立大淀希望ヶ丘小学校)、永井民子(新潟県小千谷市立片貝小学校)、中村正之(新潟大学教育学部附属長岡中学校)等とともに、研究開発に取り組んだ。小中学校における授業の提案は、日本音楽教育学会を中心に発表されてきた(伊野他 2014c, 伊野他 2015d, 伊野他 2016b)。

4 ツァンモ大会（2016年9月24日）にかかわる共同研究、相互啓発

1) ツァンモ大会開催の経緯・準備

前項で述べられているように、2015年の調査の際、共同研究者ペマ・ウォンチュクによりケルキ高等学校のガワン・ナムゲルを紹介された。彼の学校でのツァンモ実践に興味をもつこととなった。この年初めて開催されたケルキ高等学校でのツァンモ大会は、BBSで生中継され大成功をおさめた。我々の科学研究費を背景としたツァンモ調査が最終年度ということもあり、日本・ブータン共同でツァンモ大会とシンポジウムを開催することを計画した。

2) ツァンモ大会の実際

9月24日大会当日、9時すぎにケルキ高校の生徒たち約550人が観客席に着く。続いて主賓である教育大臣ノルブ・ウォンチュク Norb Wangchuk が入場した。開会の儀式、国歌斉唱につづき、日本側挨拶として伊野と黒田がこれまでのツァンモ調査の報告を行った。ケルキの学生による歓迎の踊りの後、大会参加者（ケルキ、ティンレガンの生徒各5人）がステージに登壇した。審査員が紹介され、チェアマン chairman であるクンザン・ドルジから大会開催に対するコメントの後、ツァンモ大会が開始された。クンザン・ドルジからは「日本人の方がツァンモの大切さをわかっている。ブータン人はこれから伝統文化の重要性について再考してみる必要がある」こと、「ケルキとティンレガンでは、この伝統文化の重要性を認識しており、さらに日本側からのサポートがありこの大会が行われる」こと、「BBSが撮影しており、全国放送されるため、ブータン国民がこの大会を見る可能性がある」こと、「ツァンモなどのブータンのオリジナルな文化は、親世代・祖父母世代が大切に守ってきた。私たちが今、GNH(Gross National Happiness 国民総幸福)のもとにとっても幸せに過ごすことができるのは、私たち自身によるものではなく、すべて親の世代のおかげ」であること、「教育大臣も伝統文化の重要性を思い、今日ここにいらしていただけた」ことなどが述べられた。

その後、チェアマンよりルールや審査の説明があり、ツァンモ大会が行われた。生徒による掛け合いが全5ラウンドあり、合計50回のツァンモが歌われた。詳細は、別稿（伊野ほか2016a）により報告した。大会後、審査結果が出るまで、コメディアンによるロゼ lozey、ケルキ校の生徒によるダンスが演じられた。審査結果は、僅差でケルキ校の優勝となった。主賓及び日本側ゲストにより賞状と賞金が授与された。これに続き、参加生徒及び審査員・得点集計者に対して主賓より賞状（参加証明書）の授与と記念撮影が行われた。その後、主賓のスピーチ、生徒代表から感謝の言葉があり終了となった。

3) 地域で伝承されるツァンモと大会でのツァンモの違い

これまでの調査でわかってきた地域で伝承されるツァンモと学校の大会でのツァンモでは、大きく次の点が異なる。

①ツァンモ大会では、空間が広く、人が多い。特に聴衆の規模が異なる。今回はケルキ高等学校の文化ホールという広い場所に600人近い生徒たちがツァンモを観ていた。ツァンモを歌う生徒もマイクを使い、身振り手振りも大きいほうがよいとされていた。特に相手をやりこめる歌詞（ダ・ルー）が強く表現された時、「フォー」という大きな歓声があがっていた。地域のツァンモにはみられないイベント的な盛り上がりだといえる。

②チェアマン、審査員が存在する。今回は審査員に、ゾンカ語の教師、コメディアンな

ど4名が選ばれた。また、得点集計者として両校の教師が一名ずつ選ばれた。審査員は、評価項目が示された審査表に各生徒の点数を書き、それが集計され、勝敗、ベストスピーカーが選ばれていた。優勝校、参加生徒、ベストスピーカーは、ステージ上で主賓である大臣から賞状が手渡され、記念撮影をしていた。学校対抗の大会だからこその特徴である。一方で、学校という教育現場にもかかわらず、相手をやりこめる攻撃的な歌詞も相手への露骨な求愛表現もタブー視されることなく歌われていた。この点は地域で伝承されるツァンモと変わらない点である。

③3で報告したように、地域で伝承されるツァンモにはいろいろな遊び方が存在する。品物を媒介とした占い・予言のツァンモ、相性を占ってペアをつくるツァンモなどである。学校でのツァンモ大会では、このようなツァンモは行われず、2グループによる対抗合戦の形式のみである。学校も生徒たちも占い・予言を行うツァンモの存在は認識している。それにもかかわらず、対抗合戦の形式のツァンモのみとなるのは、大会イコール対抗合戦のツァンモということになるのか。この使い分けは地域のツァンモとは異なる点であり、伝統の継承という観点からも興味深い。

4) ツァンモ大会にかかわる共同研究・相互啓発

ツァンモ大会でのクンザンのコメントでは、ブータン人(生徒だけでなく政府など大人も含め)はオリジナルな自文化としてツァンモを再考する必要性が強く訴えられていた。日本の研究者が、仏教音楽や仮面舞踊ではなく、ツァンモを調査研究していることを知り、数ある伝統文化の中でも、よりオリジナルなものとしてツァンモが見直された。ブータン側が啓発された点である。

ブータンには自分の思いを歌にのせて相互に掛け合うツァンモという遊び歌があること、そのツァンモは学校での大会として歌われても、自分の思いを歌にのせて歌われていた。さらには、学校という場にも関わらず、相手を嘲笑・攻撃する歌詞や露骨な求愛表現などが全くタブー視されていないこと、聴衆である生徒たちは強い表現がされる程、大きな歓声となって盛り上がりを見せていた。日本の学校ではなかなかみられない状況である。日本側が啓発された点である。

ツァンモ大会に参加する生徒たちは、事前に歌詞を集めている。その方法は、図書館で調べたり、家庭で親・祖父母に聞いたり、先生に聞くなどである。ツァンモの歌詞は即座に創作される部分と、既存のものがあるためである。この準備の段階に、親子間などのやりとりがうまれている。また、BBSにより全国放送されるツァンモ大会は、他地域や他の学校が啓発され、今後全国規模でツァンモ大会が行われていく可能性をもつ。ブータン・ブータン間で啓発された点である。

5 シンポジウム(2016年9月25日)にかかわる共同研究、相互啓発

シンポジウム“Bhutanese Treasure Tsangmo: Bridging Culture from the Past to the Future”は2016年9月25日(日)10時から12時、ブータンの首都ティンプーにあるホテル・プンツォ・ペルリ Phunescho Pelri の会議場で行われた。これまでの日本側の調査・研究の成果を広くブータンの人々に公表するとともに、ブータンの学校や放送でのツァンモの現在の状況や取り組みについて、ブータン、日本の両国の関係者で情報を共有し、意見交流

をするという目的のもと、登壇者を依頼した。

7月の訪問で面会したブータン王立舞踊団主任研究員クンザン・ドルジには、ブータン文化全体を俯瞰する立場から提案を依頼した。また、ゾンカ開発委員会のペマ・ウォンディには、ツァンモがゾンカ語で歌われることが多いなか、言語との関係からツァンモについて語ってもらうことにした。さらに、放送関係者としてクズFMのラジオ・パーソナリティで現在ブータン言語研究所でも学んでいるツェリン・デマ、教員養成の場での実践者としてパロ教育大学講師であるツェワン・タシ、高等学校における実践者として、前日のツァンモ大会を主宰したケルキ高等学校教師のガワン・ナムゲルには、それぞれの立場からツァンモについての発言を依頼した。加えて、司会進行と全体のとりまとめを伊野、日本の音楽教育の視点からの発表を権藤、民族音楽学の視点からの発表を加藤が行った。フロアには、ブータン国内の教育や伝統文化の行政、実演団体、大使館関係者、日本の音楽関係学会の会員等、両国で呼びかけた多様な聴衆が集まった。

シンポジウムを行うことは、私たち日本側のメンバーにとってとても重要な意味をもっていた。なぜなら、伊野を中心にツァンモの調査を展開するなかで、ブータンの人々がツァンモをどのように捉えているのか、ブータンの人々の言葉で語ってもらう必要性を強く感じたからである。

2013年の調査では、トンサなどマンディプカ Mangdebi-kha を話す地域でもツァンモはゾンカ語で歌われており、また、生活文化からは消えつつある状況であると思われた。しかし、その一方で、プナカの祭りドムチェ dromche では、周辺の11の村から代表が出てツァンモ大会をしている情報(伊野、黒田 2014a, 46)や、各地の学校でツァンモ大会を行っていること、ラジオ放送でツァンモが歌われていることもわかってきた。とりわけ、2014年の東部タシガンでの調査では、10代から20代後半の人たちが学校行事やゾンカ語の授業でツァンモを経験していること、なかには、ゾンカ語ではなく土地の言葉でツァンモを歌っていたことがわかった(権藤 2015, 23-29)。ラジオ放送「ツァンモの時間」を実際に聞くこともでき、そこでの生き生きとした電話による聴衆参加の歌合戦からは、弱々しく途絶えそうな絶滅危惧種の民俗音楽文化とは言えない、ツァンモの現代的なたくましい姿が浮かび上がった(権藤他 2015, 30-32)。

仮面舞踊など、ブータン固有の文化として注目される芸能と比べて、ごく日常的で身近な文化であるがゆえに、ブータンの人々はツァンモについてことさらに意識してこなかったのではないか。2015年にインタビューを行ったBBSのダワは、シムトカ Semtokha のブータン王立大学 Royal University of Bhutan の言語文化研究所 Institute of Language and Culture Studies で言語・文化研究 Language and Cultural Studies 専攻を卒業、BBSではツァンモの放送を担当しているが、「これまでツァンモについて研究はされていない」と語った(権藤他 2015, 18)。同様のことを2016年に会ったクンザン・ドルジもペマ・ウォンディも発言し、メラ地区のカプシューについても知る人はいなかった。

ヒマラヤ山脈の南に位置するブータンは、九州ほどの広さの国土の6割が森林で、標高差が大きく、約79万人ともいわれる多民族からなる人々は谷ごとに分かれて暮らし、20近くもの系統の異なる言語、方言を話す。20世紀後半から近代国家としての整備が行われ、そのなかで、学校制度、国語政策が進められてきたが、国語に制定されたゾンカ語も口頭言語であったため、新たに書記言語としての整備がゾンカ開発委員会によって進めら

れ、同時に学校教育は英語で行われてきた。こうした状況下において、ツァンモがなぜブータン全土で歌われているのか、また、なぜ多くの人たちがゾンカ語で歌うのか、現在の状況はどうなのかといった点について日本人の行った調査の結果を伝え、ブータンの人々の認識と日常的な取り組みを聞き、相互に交流したいと考え、シンポジウムを設定したのである。

シンポジウムにおいて、まず、クンザン・ドルジからは、ブータンは豊かな文化的な伝統をもっていることとあわせてツァンモの意味や説明がなされ、前日の日本側からの報告から多くを学んだ、という感謝の言葉が伝えられた。また、「ツァンモは牛飼いが暇なときにやっただけではない。宝石のようにまだ気づいていない大切なものである」「移動中にバスのなかでツァンモ大会をやったことがある」と語られ、今回の行事を通しての気づきが示された。この発言から、私たちは、お祭りで行われたツァンモ大会、バスの中で思わず始まったツァンモ大会、法要や仕事の合間のツァンモのやりとりなど、これまでの日常生活が学校文化に自然に「転移」したことが、学校での大会において形を変えつつツァンモが生きている要因であることを感じることができた。

ツェリン・デマからは、会ったこともない遠くの地の人同士が、ラジオを通して掛け合ったり、土地ごとの違いや相手のうまさに気づいたりすることの重要性が語られ、もっと放送を増やすように働きかけているところであり、今回もよい機会をいただいたと思っている、と語られた。そして、ツァンモでの人々の掛け合いをラジオ・ジョッキーがうまくつなぎながら、ダ・ルー、ニェン・ルーといった構成に配慮している、という発言からは、ツァンモ大会の過程が社会的に共有されてきたものであり、学校行事のなかにうまくいかされてきたことが感じられた。

また、共同研究者としてこれまでの調査に同行してきたツェワン・タシからは、「朝起きたときから夜寝るまでツァンモのことだけしか話をしていない」日本人に対する驚きが語られた。そして、調査にかかわるなかで、スマートフォン(ブータンでも非常に普及している)で友だち申請するのではなく、かつてはツァンモをしながら友だちになっていった、そういうことを大切にするように、将来先生になって子どもたちとかかわる教員養成課程の学生に伝えていきたいと思うようになった、という発言があった。実際、2015年にパロ教育大学で参観したツェワン・タシの授業では、ブータン全土から小学校教員になるために集まってくる学生たちが、それぞれの地元のツァンモを交流し、生活文化を捉え直している姿を見ることができた。

他方、国語の普及に努める委員会であるゾンカ開発委員会の主任研究員であるペマ・ウォンディが、消滅の危機にあるブータンの諸言語についての懸念を強く訴えたことは印象的だった。明治期、近代国家の建設のために国語政策が進められる一方で方言調査も行っていた日本では、国家主義的な標準語の押し付けと方言の抑圧、同時に唱歌教育も進められた。しかし、ペマ・ウォンディは、「母語と思考の方法は密接に結びついており、私たちが母語で話すことは考えたり、感じたり、信じたりすることに影響する」「言語が死ねば思考の方法も失われる」という。似ていても、母語を他の言葉に完全に置き換えることはできないし、「言葉はとても大切なもので、言葉がなくなると、踊り、歌、ツァンモ、ロゼ、すべて一緒になくなっていく」(Gondo et al. 2016)という言語学者の見解から、自文化に対する深い理解を教えられた。

6 協働の成果：人々とのつながりから「相互啓発」「開発研究」へ

2010年から本格的にはじめられた日本・ブータン民俗音楽研究会メンバーによるツァンモ研究は、日本とブータンとの間に生まれた多方面の人々や関係機関との結びつきのもとで協働しながら展開してきたことを報告した。

ここでは、そのなかから、協働による成果を生むに至った人々とのつながりから「相互啓発」「開発研究」へと発展していた様相をとらえていくことにする。

・さまざまな立場の人々とのつながり

3で報告されたように、さまざまな立場の人々とのつながりが協働のもっとも大切な要素となっている。伊野によると、意図したものでなくいつの間にかつながっていったとしているが、そのつながり方には協働が成果をもたらす鍵を見つけることができる。

まず、伊野がブータンの音楽研究に取り組み始めた時に出会った伝統音楽、伝統文化に造詣が深いパロ教育大学講師のツェワン・タシ、ゾンカ語、英語、日本語を話し、ブータン各地の多様な言語に詳しいガイドのペマ・ウォンチュクという二人の存在は、今日までのツァンモ研究の推進力となる。当初はそれぞれ情報提供者と通訳という研究協力者としての出会いであったが、相互啓発から開発研究へと展開していく中心人物となっていく。

次に、協働をすることとなった「さまざまな立場の人々」について見ていく。専門分野の広がり組織における広がりに分けることができる。

専門分野の広がりとして、音楽学者でありブータン音楽の演奏家ジグミ・ドゥッパ、ブータンの伝統舞踊・音楽の専門家舞踊団を率いるソナム・デンゴ、ブータンの民族文化の調査、記録、保存活動を行うケン・ソナム・ドルジとのつながりをあげることができる。演奏家、音楽研究者のみならず、シンポジウムではツァンモ研究に欠くことができない言語研究者、ゾンカ開発委員会のペマ・ウォンディが関わったことが大きい。一方、ツァンモ大会をチェアマンとして動かしていったのは、基調講演者であるブータン王立舞踊団主任研究員クンザン・ドルジであった。

音楽文化の研究においては、ジグミ・ドゥッパのように演奏家と研究者を兼ね備えている人物と協働していくことから得られるものは大きい。同様に、ツァンモ研究においては、ブータン王立舞踊団主任研究員でありながら、ツァンモを知り尽くしている博識に加えて、チェアマンとしてのパフォーマンス能力を備えているクンザン・ドルジは、協働していく人材として大きな魅力を持っている。

組織における人材の広がりとしては、現代社会におけるツァンモを知ることもなった人々として、学校ならびにマスメディアにおける人材とのつながりをとらえておきたい。2016年9月24日の中等教育学校間のツァンモ大会は、2015年のサムテガン・セントラル・スクールのキンレイ・ヤングゾム校長とゾンカ語教師で文化教育担当のタシの二人の教師との出会いとケルキ高等学校のガワン・ナムゲルとの出会いから生まれた。次世代の担い手である中学・高校の生徒たちが、学校でのツァンモ大会でツァンモで生き生きと対話しあう様子は、地域の調査研究からだけでは知り得なかった現代のツァンモのあり方を知ることとなった。また、FM放送局による「ツァンモの時間」やブータン国営放送BBSによる「ツァンモ・テンミ」を担当しているクズFM放送のツェリン・デマ、BBSのダワの二人のキャスターとの出会いは、マスメディアを通じたツァンモの現代における人々の楽しみ方を知ることとなった。

そしてさらに、シンポジウム等で教育行政に携わる人々へとつながっていったことも大切な点である。教育大臣ノルブ・ウォンチュク、ゾンカ開発委員会のペマ・ウォンディなどである。教育行政に生かされるつながりとして今後の協働が大きく期待できる。

最後に当然のことながら、ブータン各地でツァンモやカプシューを演じ歌ってもらった人々、インタビューに応じてくれた人々を挙げておかなければならない。研究対象ならびに研究協力者を協働する人々としてとらえることが、相互啓発を生かしていくことになる。なお、こうした様々な人々とのつながりが生まれた背景には、旅行会社シデ・ブータン Zhide Bhutan 社長のジュルミ・ツェワン Jurmey Tshewang とコーディネーターの青木薫による万全の協力体制があったことを付記しておきたい。

・「相互啓発」から「開発研究」へ

4、5で見てきたように、ツァンモ大会では、日本側からの働きかけにより学校側の伝統文化についての意識が大きく変わり、シンポジウムでは、日本側からの調査報告、ブータン側からの大学教育での実践、放送文化における新たな展開等を広く交流し合う機会をつくったことで、存続が危ぶまれている民俗音楽の継承発展に新たな光が投げかけられた。

ツァンモ大会ならびにシンポジウムの報告のうち、「相互啓発」から「開発研究」へとつながっていったものを取り上げてみたい。まず、外国人である日本人がツァンモに関心をもち詳細な調査を行ってきたことが、ツァンモへの再認識を促した。ツァンモ大会でチェアマンであるクンザン・ドルジから生徒たちに投げかけられた「日本人の方がツァンモの大切さをわかっている。ブータン人はこれから伝統文化の重要性について再考してみる必要がある」という言葉などである。そこには、日本の研究者が、仏教音楽や仮面舞踊ではなく、ツァンモを調査研究していることへの驚きからの啓発の様子をみることができる。

同様にツェワン・タシはシンポジウムで「朝起きたときから夜寝るまでツァンモのことだけしか話をしていない」日本人に対する驚きを語り、かつてはツァンモをしながら友だちになっていったことを大切にするように、教員養成課程の学生に伝えていきたいと思うようになったと語った。この啓発は「開発研究」として2015年のパロ教育大学でのツァンモの再現授業へとつながっていった。

一方、日本側が受けた啓発も数知れない。高校生同士のツァンモ大会では、一見、伝統文化とは無関係に見える高校生たちが、ツァンモの歌詞のレパトリーを数多く持ち、その暗喩を理解した上で、旋律を選びながら即興的に歌を掛け合っていく姿に大変な衝撃を受けた。聴衆である生徒たちもツァンモをよく理解し、その表現内容をとらえて大きな歓声をあげるような盛り上がりを見せていた。ここから、歌を掛け合うことの意味をとらえ実践につなげる研究が「開発研究」としてはじまっていることは、2で述べた通りである。

また、シンポジウムでは、立場が異なりながらツァンモの大切さを広く伝えてきたブータンの識者が一同に会して語り合う場を設けたことの意義を強く感じることもあった。ペマ・ウォンディの「言葉はとても大切なもので、言葉がなくなると、踊り、歌、ツァンモ、ロゼ、すべて一緒になくなっていく」(Gondo et al. 2016)という言語学者としての見解ほか、ツァンモのみならず自文化に対する深い理解の言葉の数々を聞くことができた。ここから受けた大きな啓発は、これまで継続してきたツァンモ研究をブータンとのさらに強い協働のもとに行う必要性への認識につながり、また多様な「開発研究」の可能性への展望をもたらすものとなった。

本稿は検討を全員で行い、2, 6を加藤、1, 3を伊野、4を黒田、5を権藤が分担執筆した。また本研究は、JSPS 科研費 JP26301043 の助成を受けたものである。

【文献（研究成果物）】

- ・伊野義博 (2012) 「ブータン歌謡ツァンモ — 掛け合いと占いの諸相 —」『民俗音楽研究』第 37 号、日本民俗音楽学会、pp. 1-12.
- ・伊野義博、黒田清子 (2014a) 「ブータンのツァンモ、占いと掛け合いの諸相 — プナカにおける調査から —」『民俗音楽研究』第 39 号、日本民俗音楽学会、pp. 37-48.
- ・伊野義博、尾見敦子、黒田清子、権藤敦子、山本幸正、Tshewang Tashi、Pema Wangchuk (2014b) 「ブータン歌謡ツァンモの実際 — トンサ県ツァンカ村とタンシジ村の場合 —」『新潟大学教育学部研究紀要』第 7 巻第 1 号、pp. 81-99.
- ・伊野義博、加藤富美子、黒田清子、権藤敦子、山本幸正、娜布其 (2014c) 「『掛け合い歌』の教育学 I」『音楽教育学』第 44 巻第 2 号、日本音楽教育学会、pp. 90-94.
- ・伊野義博、黒田清子、権藤敦子、Pema Wangchuk (2015a) 「ブータン歌謡カプシューの実際 — タシガン・メラ村の場合 —」『新潟大学教育学部研究紀要』第 7 巻第 2 号、pp. 335-359.
- ・伊野義博、黒田清子、権藤敦子、ペマ・ウォンチュク (2015b) 「ブータンのあそび歌ツァンモとカプシュー — トンサとタシガンにおける調査から」『民俗音楽研究』第 40 号、日本民俗音楽学会、pp. 1-12.
- ・伊野義博、加藤富美子、黒田清子、権藤敦子、山本幸正、永井民子、明道春奈、娜布其 (2015d) 「『掛け合い歌』の教育学 II」『音楽教育学』第 45 巻第 2 号、日本音楽教育学会、pp. 74-78.
- ・伊野義博、黒田清子、加藤富美子、権藤敦子、山本幸正、ツェワン・タシ、ペマ・ウォンチュク (2016a) 「ブータンの遊びうたツァンモ — 学校教育における継承の取り組み」『新潟大学教育学部研究紀要』第 8 巻第 2 号、pp. 167-192.
- ・伊野義博、永井民子、中村奏絵、中村正之 (2016b) 「音楽授業における〈掛け合い歌〉の実践的研究」『新潟大学教育学部研究紀要』第 9 巻第 1 号、pp. 125-155.
- ・伊野義博、娜布其 (2017a) 「チベット族掛け合い歌エレシクの構造 — 中国青海省剛察県の場合 —」『新潟大学教育学部研究紀要』第 9 巻第 2 号、pp. 325-357.
- ・伊野義博、黒田清子、加藤富美子、権藤敦子、山本幸正、ツェワン・タシ、ペマ・ウォンチュク (2017b) 「ブータンの遊びうたツァンモ — 学校教育における継承の取り組み その 2」『新潟大学教育学部研究紀要』第 9 巻第 2 号、pp. 301-324.
- ・伊野義博 研究室 (2015, 2016, 2017) 『掛唄報告書』新潟大学教育学部伊野研究室
- ・黒田清子 (2012) 「ブータンの国民総幸福 (gross national happiness) と自文化観」『金城学院大学論集』社会科学編第 8 巻第 2 号、pp. 19-37.
- ・黒田清子 (2014) 「ブータン文化の諸相 — 掛け合い歌ツァンモ (tsangmo) の歌詞からの考察 —」『金城学院大学論集』人文科学編第 11 巻第 1 号、pp. 193-220.
- ・黒田清子 (2016) 「ブータン文化におけるあそび歌「ツァンモ tsangmo」の位置づけ — ジグミ・ドゥッパ氏へのインタビューをてがかりに —」『金城学院大学論集』人文科学編第 12 巻第 2 号、pp. 112-120.
- ・権藤敦子、伊野義博、黒田清子、Pema Wangchuk (2015) 「歌唱における学習過程の再考 — ブータン歌謡ツァンモの調査をてがかりに —」『初等教育カリキュラム研究』第 3 号、

広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座、pp.23-35.

- ・権藤敦子、明道春奈、伊野義博、加藤富美子、黒田清子、永井民子、山本幸正 (2016) 「歌唱における学習過程の再考(2)—ブータンの掛け合い歌をてがかりにした実践開発—」『初等教育カリキュラム研究』第4号、広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座、pp.15-27.
- ・娜布其 (2014) 『『掛け合い歌』における「うまい」即興能力とは—内モンゴルの『ウルゲーホラボー』の場合—』『民俗音楽研究』第39号、日本民俗音楽学会、pp.25-36.
- ・娜布其 (2015) 「内モンゴル『アンダイ』の変遷から見た『掛け合い歌』の消滅」『現代社会文化研究』第61号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、pp.31-47.
- ・娜布其 (2017) 「チベット族の掛け合い歌エレンシクの歌詞の内容と修辞法」『現代社会文化研究』第64号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、pp.19-36.
- ・Atsuko Gondo, Yoshihiro Ino, Tomiko Kato, Kunzang Dorzi, Pema Wangdi, Tshewang Tashi, Thering Dema, Ngawang Namgyel. 2016. "A Discussion on the Singing Dialigüe Tsnagmo: Bridging Culture Between Bhutan and Japan, from Past to the Future". *Bulletin of The Graduate School of Education. Hiroshima University Part.1 (Learning and Curriculum Development) Vol. 65*, pp. 43-52.

【他引用・参考文献】

中尾佐助 (1959) 『秘境ブータン』毎日新聞社

糸永正之 (1986) 「ブータンの「相聞歌」—交互唱による対面伝達行動の予備的研究—」『学習院大学東洋文化研究所研究報告』No.21

藤井知昭 (1988) 『東西音楽交流学術調査報告書V インド東北部・ブータン民族音楽学術調査(1986)』東西音楽交流学術調査、国立民族学博物館

The Japan Society for Bhutanese Folk Music Studies hosted the "Tasangmo Competition & Symposium : Bhutanese Treasure *Tasangmo* : bridging culture from the past to the future" in Thimphu, the capital of Bhutan from September 24 to 25, 2016. It consisted of a *Tasangmo* competition of two secondary schools and a symposium aimed at the promotion of traditional cultural activities and extensive mutual cultural exchange.

In this study we point out the significance of the collaboration in the development of the *Tasangmo* study as a "collaborative investigation", "mutual enlightenment", "or a development study" while tracing the aspect of the collaboration in our research activities spanning seven years.

(加藤 = 本学教授、音楽教育、伊野 = 新潟大学教育学部教授、音楽教育、黒田 = 東京福祉大学国際交流センター特任講師、文化人類学、権藤 = 広島大学大学院教育学研究科教授、音楽教育)